

世界で活躍するための英語力

平岡 塾

受験テクニックにとどまらない 「二生モノ」の英語力を手に入れる

グローバル化が急激に進行する中、今後はどんな分野に進んでも、英語力が不可欠になる。それも単にコミュニケーションが図れる「日常会話レベル」ではなく、厳密なビジネス文書が作成できる高い英語力を備えていなければ、業務に支障をきたすシーンも増えてくるだろう。受験テクニックにとどまらず、専門研究やグローバルビジネスにも対応できるレベルの英語力が修得できる専門塾として定評のある平岡塾の卒業生に、同塾の教育の特色と、現在の仕事に役立っていることなどを聞いた。

仕事で使う英語は「厳密性」が要求される

——現在の仕事内容を教えてください。

中田 東京大学文学部を卒業後、グローバルに活躍したいと思い、海



大手通信会社 経営企画部
中田 有紀 さん

外展開を進める大手通信会社に入社しました。最初の配属は、法人のお客様が海外に進出する際に、ネットワークサービスを提供する営業部門です。その後、シンガポールのM & A 会社に出向し、セールスを担当しました。そうしたグローバルでの経験を生かして、現在は経営企画部で事業計画を担当しています。海外グループ会社（現地法人やM & A 会社）の事業計画を策定し、計画通りに事業が進んでいるかのモニタリングが主な業務です。

——仕事で使う英語は、日常会話レベルとは異なる面があるのでしょうか。

中田 私は海外グループ会社を担当していますし、当社ではシステムやアプリケーションの開発を海外（インド等）にアウトソーシングするケースもあるため、特にシンガポー

ル出向時は日本語よりも英語を使うことの方が多かったですね。ただ単に仲良くなるだけでいいのなら、コミュニケーションが図れば十分ですが、仕事で使う英語となると「厳密性」が要求されます。初めて会った人、利害関係の異なる人と仕事をすることも多く、微妙な言葉のニュアンスをくみ取り、それを踏まえた文章を作成できる能力が必要になるのです。

たとえば、お客様の要件に合わせたシステムを構築する場合、英語で提案書、契約書を作成します。どのような要件が課されたのか、相互に正しく認識できる表現にしなければなりませんし、そのサービスを提供した後、問題が発生したときに、どこまでが責任範囲が明確に決めておく必要があります。また、プロジェクトを進める際には、役割分担を明

文化することも重要です。日本人の場合、チームで協力するのが当たり前で、手が空いている人がカバーしてくれませんが、外国人はあらかじめ決められた自分の役割以外の仕事には手を出そうとしません。これは、協調性の問題というよりも、他人の仕事をとつてはいけない、責任外の仕事をしては評価につながらない、という意識によるもののようなです。口約束や阿吽の呼吸は通用せず、適切な表現で文章に残しておくことが大切なのです。平岡塾で身につけた「厳密性」を追求する英語力が役立っていることを痛感するときでもあります。

難解な英語学術論文も苦にしない力が身につく

——平岡塾に通うようになったきつ

かけを教えてください。

中田 父の仕事の関係で、6〜7歳のとき、イギリスの現地校に通いました。その「貯金」があったので、英語に苦労することはありませんでした。けれども、問題を正解することとまではできるのですが、理論が分かっているわけではなく、口に出してみてしっくりくる表現を感覚的に選んでいただけでした。そんな私を見た母が、きちんとした文法を学び直した方がいいと、平岡塾を勧めてくれたのです。

——平岡塾の印象はいかがでしたか。

中田 中2の終わり頃に入ったのですが、中1から通っている同級生たちが、分厚い洋書を原文で読んでいる様子を見て、このままでは取り残されてしまうと衝撃を受けたことを覚えています。

——どのような授業だったのですか。

中田 平岡塾の授業は、週1回、約3時間連続で行われます。文法、長文読解、英作文各1枚、それぞれ解くのに1〜2時間かかる宿題が課され、授業ではその解説が中心になります。暗記してくる例文のプリントもあり、授業で、先生の前で暗唱することで、英語特有の表現が自然と身につきました。

教材は、デカルトの『方法序説』、ラッセルの『教育論』、アメリカの『独立宣言』、サイードの『オリエンタリズム』などが用いられていました。日本語訳でも難解な文章を、英語で読み進めていくわけです。私は東京大学で美学芸術学を専攻したので、この分野の英語学術論文は、一文がきわめて長いことがあります。けれども私はまったく苦になりませんでした。平岡塾で、すでに難解な英文に触れ、語順通りに訳していく方法や、カンマの使い方、接続詞の前後の関係などを修得したおかげだと感じています。

——当然、大学入試で武器になる英語力が養われるわけですね。

中田 平岡塾では、英語を勉強するのは大学入試のためではなく、将来どんな分野に進んでも、活躍できる世界を広げるために勉強するという方針が徹底されています。受験テクニックにとどまらず、その後の人生でさらに磨きがかかるような英語力の養成に重きを置いているのです。それは、大学入試レベルを超え

た教材を用いていることでも分かります。とはいえ、大学入試でも大きな武器になることも確かです。私は高2までに東京大学の入試問題にも十分に対応できる英語力を固めて、高3では他の科目に力を注ぐことができました。それぐらいの高みをめざしている塾なのです。

自由な雰囲気での授業の中で たくさんの友人ができる

——そのほか、平岡塾に通ってよかったと感じていることがありますか。

中田 一生付き合える友人に恵まれたことがよかったと思います。社会人になった今でも、平岡塾時代のOB・OGが集まり、先生を囲んで親睦会を開いています。これは、友人ができやすい授業だったことも関係していると思います。平岡塾の授業では、教室に座卓が並び、好きな場所に座ります。授業中に飲み物や軽食をとるのも自由です。隣の友人からお菓子をもらったり、先生に指名されそうになったら、分からないところを友人に教えてもらったり、リラックスした雰囲気での授業を受けることができました。私の母は「サロンのような環境の中で、思春期の人間形成にとっても有意義だった」と語っています。

先生方のレベルの高さも大きな特長です。英語専門の先生だけでなく、生徒たちが志望校にしている大学で研究を続けながら教えている先生も



平岡塾で使用している教材。ラッセル、オーウェルなど、古典的名著の名文が中心だ。

多く、教材の文章の背景にある文化、宗教などにまで踏み込んだ授業が行われ、深い教養に触れることができました。

——最後に、中高生へのアドバイスをお願いします。

中田 私は、英語は努力を裏切らない科目だと思っています。コツコツ勉強すれば、必ず英語力は高まります。そして、いったん身につけば「二生モノ」の財産になります。ただし、英語だけ勉強すればいいというものではありません。平岡塾の先生方も「日本語力がなければ、英語力も一定のレベルで止まってしまう」とよくおっしゃっていました。日本語で分からないことを、英語で理解できるはずもないからです。ですから、中高時代にぜひ、読み応えのある日本語の本もたくさん読んでほしいと思います。